

と、店の奥さんが、それは長い間ご苦労さまでしたと言って、三百円値引きして下さい。その瞬間私の目から涙が出て、何べんも頭を下げてありがとうとお礼を言くと、さらに下着のシャツを一枚下さった。日本に帰って一番最初にうれしかったのはこのときであった。

そのときの私の服装は軍服に編上靴（軍隊の靴）であった。

## 満州からシベリア抑留の思い出

熊本県 岩野 寅雄

満州からシベリアへ

昭和二十年八月八日、チャムスにて現地召集を受け牡丹江へ向かう、途中林口でソ連機の空襲を受け小型爆弾と機銃掃射により多数の犠牲者が出た。牡丹江の満鉄グラウンドにて部隊編成中再び空襲を受け、相当数の死傷者が出た。私もそのとき伏せて背にしていた雑囊が爆弾の破片でやられた。そのとき、長崎県大村出身の中村秀

市開拓団長が臀部を破片で負傷し、その夜「仇はとってくれ」の一言を残し息を引きとられた。翌朝火葬に付き、ソ連の戦車部隊が急速に迫ってくるため三々五々に散り、横道河子まで退却し、そこで終戦になり、白旗を掲げ無念の涙のみ武装解除されたが、その前に武器弾薬の一部を川へ投げ捨てた。

拉古収容所へ逆戻りして、九月二十二日シベリアへ向けて行軍にて出発。ウラジオストックから日本へ送還するという。半分信じながら歩き続けた。途中友軍のものと思われる人馬の死体の腐乱したその異様な臭気のただよう道路を、疲れきった足どりで半分眠り、ふらつきながら歩き続けた。途中逃亡しようとした者が何人か射殺された。警備兵は自動小銃（七十二発詰めマンドリン）をいつも肩からつり、前に構えていて時折ダワイダワイの声とともにパンパンと威嚇する。私は大隊長当番を拜命していたので、大隊長の荷物を背にして歩き続けた。綏芬河に着いたときはもう暗くなっていた。炊飯するため、少し下方を流れる川へ暗がりの中、水を汲みに行く、そこでも異様な臭いがしたが、かまわず水を汲み

持ち帰り、飯ごう炊飯する。翌朝また同じところに水を汲みに行くと、そこにはすぐ二メートルくらい上流の岸辺に何かの死体があった。国境近くの綏陽の広場にソ連軍のトラック部隊が待機していた、それに分乗し入ソした。沿海州のウオロシロフ地区ハリリーの草原に到着、そこで冬になるまで草刈り、こん包(畜力)、駅までの積みおろし作業をさせられた。

そのある日のことだった。駅裏でこん包乾草を積み上げる作業をしていたが、夕方になり他の作業隊も帰るので、秋田県出身の村上伍長(作業班長)が身振り手振りで自分たちも帰りたいという、警備兵は聞き入れないで仕事を続けるという。寸時の間どちらも黙っていたが、村上伍長が仕方ない、今少しやるかといつてこん包を持ち上げる棒を握ったところ、そのときズドンと一発、弾は村上班長の胸部を横から貫通した。「ウオッ」と一声立てて後方に倒れ、見るうちに真っ青になった。私たちは早速担架をつくり乗せ帰る。ソ連側としては逆逆して棒で立ち向かってきたとされていた。言葉がわからないためかようなことになり、残念であった。

私はそれからまずロシア語を覚える必要があると思いい、少しずつ渡辺通訳(茨城県出身)から教えてもらった。

草原に自分たちでつくった半地下式住家は、骨組を付近にある柳の木をより合わせ、屋根は草ぶきで幾つも並べてつくられた。横の中央に階段を設け、室内の両側に六、七人ずつ寝るようにして真ん中に少し火を燃やして暖をとった。一回火の不始末で火災を起こしたこともあった。冬になり山の木の伐採、運搬、貨車への積み込み作業等をさせられた。シベリアの冬は厳しい、寒さを通り越し痛く感ずる。黙っていることはできない、動いていないと一段と寒さを覚えるからである。

狭い舎に詰め込まれ寝起きしていると、一番に繁殖するのが着物シラミで、一夜に七山越えるともいう。食事も足りないので栄養失調になり、シラミに悩まされ、ますます体力は衰えていく。ゆえに発疹チフスが流行して、昨日二人、今日三人と、シベリアの地で帰国を夢みながら無念に散っていった。その数は計り知れない。私たちの大隊も一千人編成であったが、二年目の冬には約

百人くらいが犠牲となって逝った。

ここで記したいことは民主運動のことである。支給される糧秣は将校と兵とは別に支給されていたので、私は大隊本部要員としてバケツで煮炊きして任を果たした。二年日の春ころだったと思う、ラーゲル内に民主運動が盛り上がり、将校は威張っている、軍国主義者であり帝國主義者であるというのだ。抑留された以上は皆同じで差別するべきでない、まず食するものも同じにすべきである、等でつるし上げのようなことが起こった。そのころソ連側からマルクス・レーニン主義の理論、史的唯物論等のパンフレット（日本語版）を配布するかわら、赤旗の歌、ワルシャワの労働歌等幾つかの歌を通じ啓蒙運動が行われた。中にはほんとに真剣になっている者もいた。

大隊の中に中村憲一という作曲家がいた。私も「ソ満国境を越えるとき」と題して作詩して作曲してもらい、歌った感激を覚えている。

また、ラジオ技術者もいた。満州から戦利品としてあらゆるものが貨車で搬入された中にラジオがあったが、

取扱い方を知らず倉庫の隅に放ってあったものを組み立て、日本放送を時々聞いていた。よく仙台放送が入っていたが、それもつかの間、察知されて取り上げられた。

三年目の夏の終わりのころ、小口分遣の命がきて十人とロシア語のわかる者一人、計十一人、一時間後に門前に集合せよと、ソ連の命令は実に急であった。そのとき大隊長は涙ながら、お前が通訳代理で行ってくれと言われた。ところは航空隊農場の使役であった。収穫したキャベツ、トマト、キュウリ、スイカ等を直径約三メートルくらい、深さ三メートルくらいの大きな円形をしたコンクリート製の容器に、キャベツはカッターで刻み込み、あるていど刻んで塩をまき、長靴で踏み込む。その他は丸漬いで甘塩で漬けるので、少し酸味のあるのがロシア漬の特徴である。

バレイショが多くつくられるが、収穫はやはり人手であった。掘り方の使役は楽しかった。バケツをかぶせてまわりに火をたくと中の芋はおいしく焼ける。皮をむくと白くはじめて、出でん粉の味は忘れられない。

帰国命令が来てナホトカに着いて順番を待つ間も、い

ろいろと啓蒙運動が行われた。二十三年九月二十九日、信洋丸に乗船したときには、もう初雪がちらちらと舞っていた。日本海の荒波に酔いながら舞鶴へ向かう、日本の島々が見えたときはみんな甲板に上がり、やっと帰れた感激に涙を流しうれしさにひたった。

シベリアでの大隊本部要員は、大隊長松本鉄之助少佐、兵庫県出身(当時五十二歳くらい)、副官杉野雄二中尉、長野県出身、通訳渡辺伍長、茨城県出身、伝令・当番子藤本三二等兵、熊本県阿蘇郡色見村出身。

私の記憶しているソ連より支給された糧秣の一人当たりの定量は一日パン三百五十グラム、穀物類四百五十グラム、魚肉類二十五グラム、油十グラム、砂糖十八グラム、タバコ五グラム、とはなっている受領は不正確であった。

## シベリア抑留記憶を追って

福井県 尾上敏雄

私は昭和二十年二月、中部第三十六部隊より新設部隊要員として、満州国黒河省孫呉に到着、部隊編成の諸準備に従事、同四月五日新設の第一〇七師団第二七〇連隊を編成、同日軍旗拝受、同連隊の通信中隊内務係として服務、同年八月一日遼陽教育隊に学生として入隊、同八月八日、日ソ開戦のため同月十三日学校解散、原隊復帰のためハリピン市まで到着しましたが、原隊と連絡が取れないので、同僚とともに新編の混成第一三一旅団司令部に仮配属、ハリピン市内の防衛に従事、当時ハリピン日満会館に旅団司令部があり(旅団長井部信時少将)司令部の通信業務に従事しておりましたが、必勝を期した日中戦争も八月十五日正午をもって敗戦となった。思えば二十年二月渡満して六か月有余で悲しい敗戦となった。